

## 教職を目指す大学生の模擬授業におけるルーブリックの提案

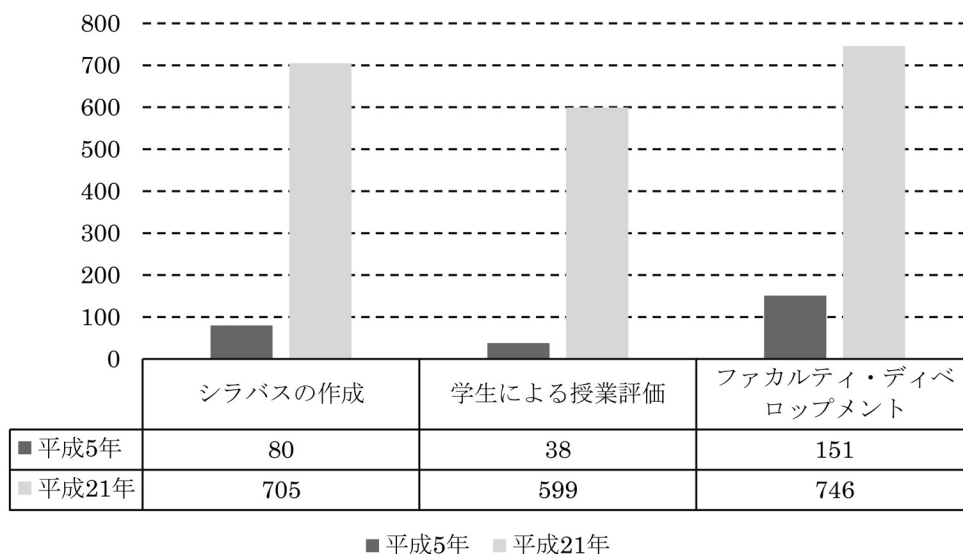
### Suggestion of Rubrics of the Case Study Based on Trial Lessons of the Students Majoring in the Teaching Profession

浦谷 淳子

#### 1. はじめに

平成 24 年（2012 年）8 月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学士課程教育の改善に関して、「学士課程教育については、累次の本審議会や大学審議会答申を踏まえ、種々の改善が行われてきた。平成 3 年の大学設置基準の改正以降は、大学は学士課程教育を自らの理念に基づき組織的に提供し、それを常に改善することが求められ、その結果、例えば、授業計画（シラバス）を作成する大学は平成 5 年の 80 大学（15%）から平成 21 年の 705 大学（96%）、学生による授業評価は 38 大学（7%）から 599 大学（80%）、ファカルティ・ディベロップメントは 151 大学（29%）から 746 大学（99%）にそれぞれ増加するなどの進展が見られた。」<sup>1)</sup>と経緯を述べている。

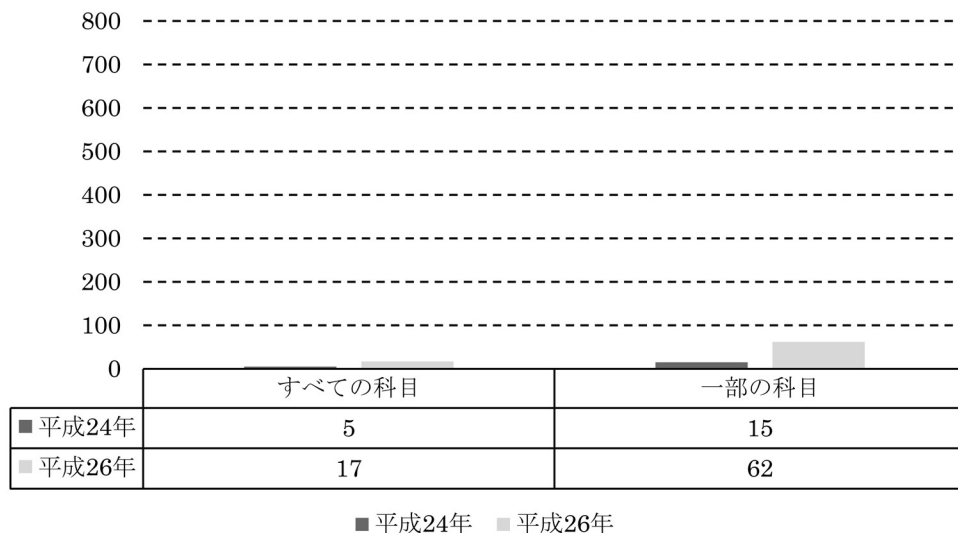
この、大学における学士課程教育の改善について、まとめたものが（図 1）である。



（図 1）学士課程教育の改善（平成 24 年の答申をもとに筆者作成）

また、速やかに取り組むことが求められる事項として、「成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメント・テスト（学修到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。」<sup>2)</sup>と書かれ、ルーブリックの導入にもふれている。しかし、平成28年（2016年）12月13日に文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室が発表した「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」に掲載されている表によると、「すべての科目をルーブリックにより明示している大学は平成24年の5大学（0.7%）から平成26年の17大学（2.3%）、一部の科目をルーブリックにより明示している大学は平成24年の15大学（2.0%）から平成26年の62大学（8.4%）」<sup>3)</sup>であり、ルーブリックの導入が積極的に行われているとは言えない現状である。

この、ルーブリックの明示についてまとめたものが（図2）である。前述の学士課程教育の改善（図1）から、日本全体の80%~99%の大学が学士教育課程の改善を行っていることが分かるが、図2からは、一部の科目でもルーブリックの明示をしている大学は全体の8.4%しかないことが分かる。



（図2）ルーブリックの明示（平成26年度改革状況をもとに筆者作成）

さらに、平成32年（2020年）から実施される新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善が強調され、現行の学習評価の4観点（①関心・意欲・態度、②思考・判断・表現、③技能、④知識・理解）から3観点（①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度）に変更することを明記している。この評価について、平成28年（2016年）8月に公

表された、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ補足資料<sup>4)</sup>（これ以降：補足資料）では、多様な評価の例として「パフォーマンス評価」「ルーブリック」「ポートフォリオ評価」が取り上げられている。「ルーブリック」については、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。」であると説明し、ルーブリックのイメージ例（表1）も紹介している。

（表1）ルーブリックイメージ例（出展：補足資料 p16）

項目	IV	III	II	I
項目	…できる …している	…できる …している	…できる …している	…できない …していない

記述語                      ルーブリックのイメージ例

このような状況から、ルーブリックを導入することは喫緊の課題であると考え、大学の教員養成課程におけるルーブリックの導入を筆者が2016年度に実践した。<sup>9)</sup> その実践において、教職を目指す学生の英語模擬授業でルーブリックを活用することは、学修者である学生自身が見通しを持って取り組み自己評価もできるという面で有効であるという示唆を得た。そして、ルーブリックの作成方法に改良が必要であるという課題を得ることもできた。

そこで本稿では、2016年度の実践を振り返り、その成果と課題を受けて実践した2017年度の取り組みを通して、大学の教員養成課程におけるルーブリックの効果的な活用について考察したい。

## 2. 2016年度の実践の振り返り

教職実践演習等と英語Ⅱの授業で、学生が模擬授業を行う際にルーブリックの表を活用し、自己評価及び相互評価を行った。この取り組みの中の、教職実践演習等での実践について以下に述べる。

### 2. 1 教職実践演習等での模擬授業におけるルーブリック導入の成果と課題

教職実践演習（4年生男子1名、4年生女子4名）と英語科教育法Ⅳ（3年生男子3名）、合計学生8名の合同授業で、他の学生を生徒に見立てて学生が模擬授業を行った。模擬授業を行う前にルーブリックについての知識を尋ねたところ、ルーブリックを知っている学生はいなかった。そこで最初にルーブリックの意味や評価の仕方を説

明した。そして模擬授業を行う前に、自分が目指す模擬授業のイメージをもつためにはどのような準備が必要かを意識させ、学修の見通しを持たせるために、指導者が作成した「ループリック 2016」を示した。「ループリック 2016」の評価項目は、①授業の全体的なデザイン、②生徒の活動内容、③教師の英語での発話、④教師の声の大きさや間の取り方、⑤生徒との関わり方、⑥板書、の6項目で、それぞれに1点から4点の4段階の尺度があり、そのレベルに対応する記述語で、以下のように評価基準を表した。6項目にすべて4点の評価をすると満点は24点となる。

①授業の全体的なデザイン

- 4点：説明や生徒の活動など、授業の流れが良い
- 3点：時々、授業の流れが途切れる
- 2点：少し関連している
- 1点：一つ一つの活動が関連していない

②生徒の活動内容

- 4点：ほとんどの生徒が興味を持ち英語を発話したくなる活動内容
- 3点：約半分の生徒が興味を持つ活動内容
- 2点：数人の生徒が興味を持つ活動内容
- 1点：生徒が興味を持たない活動内容

③教師の英語での発話

- 4点：ほとんどの生徒に理解できる英語を使って、わかりやすく説明している
- 3点：英語を使って説明しているが、理解できていない生徒もいる
- 2点：英語を使っているが、日本語の方が多い
- 1点：すべて日本語

④教師の声の大きさや間の取り方

- 4点：生徒全員に聞こえる大きさと、適切な間の取り方である
- 3点：ほとんどの生徒に聞こえているが、間の取り方が適切ではない
- 2点：半分の生徒には聞こえている
- 1点：全員に聞こえていない

⑤生徒との関わり方

- 4点：必要で適切な支援をしている
- 3点：動いて、時々支援をしている
- 2点：動いているが、支援をしていない
- 1点：同じ場所において、支援をしていない

## ⑥板書

- 4点：授業の最後に黒板を見ると、本時の学習内容がよくわかる
- 3点：大体の内容がわかる
- 2点：字が乱雑で、内容もわかりにくい
- 1点：ほとんど板書していない

評価用紙にはさらに「模擬授業の良かった点」と「自分ならどうするかという提案」の記述欄を設けた。受講していた8名の学生は、このルーブリックを事前に確認し、それぞれ1回ずつ合計8回の模擬授業を行った。その際ルーブリックに基づいて、生徒役の学生は模擬授業を行った教師役の学生に対して評価し、模擬授業を行った教師役の学生は自己評価を行った。また、模擬授業の終了後に学生全員で交流を行った。

模擬授業に参加した学生がルーブリックに基づいて評価した点数の合計、学生全員の平均、生徒役だけの平均、指導者の評価を表したものが、「ルーブリック 2016の結果」(表2)である。この結果、全員の平均と指導者の評価に大きな差は認められなかった。このことから指導者の評価は、学習者にとって納得できる結果であることが分かる。

また、全員の平均点数よりも生徒役だけの平均点数の方が高い傾向にある。このことは、模擬授業を行った学生が自分の授業内容についてより厳しく自己評価している結果であると考えられる。

(表2)「ルーブリック 2016」の結果 (満点 24 点)

	11月 30日	12月 7日	12月 14日 C	12月 14日 S	12月 21日	1月 11日 M	1月 11日 T	1月 25日
合計	64	115	148	112	166	110	99	119
学生全員の平均	21.3	19.1	18.5	16	20.8	18.3	16.5	19.8
生徒役だけの平均	22	20.6	19.1	16	21.2	19.8	17	20
指導者の評価	22	21	19	17	20	20	17	20

また、模擬授業ごとにルーブリックでの評価結果をまとめた。表の上段、日時の下段のアルファベットは模擬授業を行った学生のイニシャルで、例えば「11月11日T」(表3)ならば11月11日に学生Tが模擬授業を行ったということである。また、指導者の隣のアルファベットは模擬授業で生徒役をしている学生のイニシャルである。

11月30日は3名、12月7日は5名、12月14日は7名、12月21日は7名、1月11日は6名、1月25日は5名が授業に参加している。

ルーブリックの6つの項目それぞれの平均点をグラフ3に表した。(図3) このグラフから、1月11日にTが行った模擬授業における生徒支援の観点において、指導者の評価と学生の評価の間にずれがあることが分かる。指導者の評価は2であったが、生徒役の学生の平均は3.7(評価4の学生が2名、評価3の学生が3名)、授業者の学生の自己評価は3であった。そこで、模擬授業後の交流の中で、生徒支援のあり方について話し合った。生徒役の学生はどの場面を考慮して、生徒支援の評価を3や4としているのか、授業者はどのようなことに配慮して生徒支援をしていたのか、また、どうして評価が2であるのかという指導者の説明も加えた。

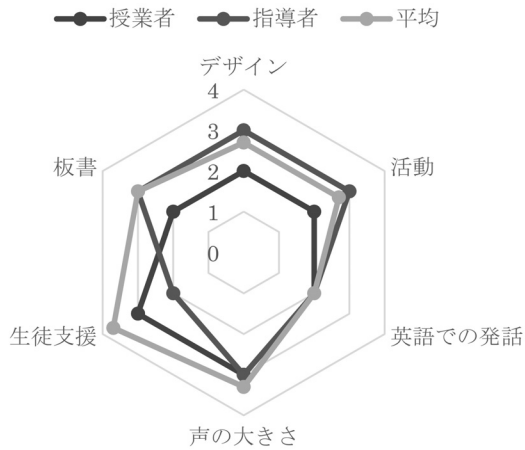
このような交流後、次の1月25日の学生Yが行った模擬授業では、生徒支援の観点における評価は、指導者と授業者は4、生徒役の学生の平均は3.5で、ずれが小さくなった。(表4)、(図4)これは、評価のずれが大きかった1月11日に、学生同士の話し合いと指導者からの説明を行ったことによって、生徒支援に対する共通理解をしたため、その後の1月25日の模擬授業では、生徒支援についての評価のずれが小さくなったと考えられる。

このことは、ルーブリックを導入することによって、授業内容を評価する力の育成にもつながることを示唆していると考えられる。

(表3) 1月11日 T

1月11日T	本人	指導者	S	C	Y	T	A
デザイン	2	4	4	4	4	3	4
活動	1	4	2	4	3	2	4
英語での発話	1	3	2	3	2	2	3
声の大きさ	2	4	2	4	4	3	4
生徒支援	2	3	3	3	4	3	4
板書	3	3	4	4	4	3	4

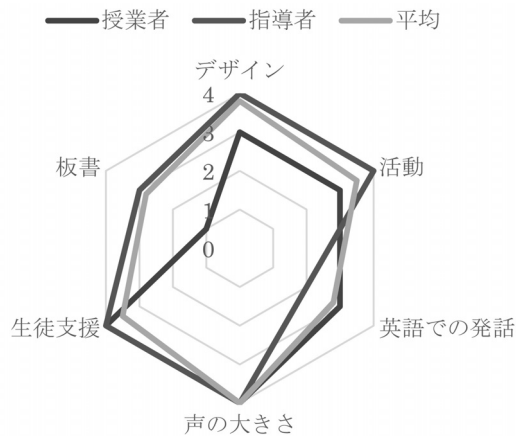
教職を目指す大学生の模擬授業におけるルーブリックの提案



(図3) グラフ3 1月11日 T

(表4) 1月25日 Y

1月25日 Y	本人	指導者	S	C	Y	K
デザイン	3	4	4	3	4	4
活動	3	4	3	4	4	3
英語での発話	3	2	3	4	2	2
声の大きさ	4	4	4	4	4	4
生徒支援	4	4	3	4	4	3
板書	1	3	3	3	3	2



(図4) グラフ4 1月25日 Y



2016年度の実践では上述のような成果を得られたが、一方で課題を得ることもできた。それは、ルーブリックの作成方法である。指導者である教員がルーブリックを作成して学修者に提供するのではなく、学修者が作成に関わることで、より課題を明確にすることができるのではないかという点である。そこで次年度である2017年に、その課題について取り組んだ実践について次に述べる。

### 3. 2017年度の実践

2で述べた2016年度の実践の課題の一つは、「今回、授業の指導者である筆者自身がルーブリックを作成したが、今後は、学生と共に作ること」<sup>6)</sup>である。その理由として、「学生が自分でルーブリックを作成することは、学修内容を把握し自分で自分の学びをデザインし、自立した学修者の育成につながると考えられるからである。学修者と学修内容に適したルーブリックを作ること自体が学修者にとっての学びであり、学修者と指導者が共にルーブリックを作るとは、まさに指導と評価の一体につながる」<sup>7)</sup>と考えられる。

そこで、2017年度は、後期の教職実践演習で、履修学生とともにルーブリックを作成した。この授業は高等学校商業科の教職を目指す4年生4名と中学校英語教職を目指す4年生3名の合計7名が履修している。そして、中学校英語教職を目指す4年生3名は2016年度にルーブリックを活用した模擬授業を体験している学生である。

履修学生は7名全員が2017年5月から9月の間に4週間の教育実習を体験している。その後10月6日に静岡大学付属浜松中学校の英語公開授業、11月1日に浜松市立丸塚中学校の英語公開授業を参観し、模擬授業を行った。また、高等学校商業科教職の学生は2016年度に商業科教育法の授業で商業高校の授業を参観している。

#### 3. 1 ルーブリックの作成

商業科と英語科という二種類の教科の教職を目指す学生が同時に学ぶ授業であるため、2016年度のルーブリックの「③教師の発話」の項目を商業科用と英語科用に分けて以下のように指導者が改訂したワークシートを配布し、改良点について考えてくることが課題とし、次の授業で改良点について話し合った。(図5)

##### ③教師の発話(商業科)

- 4点：ほとんどの生徒に理解できるように、わかりやすく説明している
- 3点：約半分の生徒が説明を理解できている
- 2点：約三分の一の生徒が説明を理解できている
- 1点：ほとんどの生徒が説明を理解できていない



### ③教師の発話（英語科）

- 4点：ほとんどの生徒が理解できる英語を使って、わかりやすく説明している
- 3点：英語を使って説明しているが、理解できていない生徒もいる
- 2点：英語を使っているが、日本語の方が多い
- 1点：すべて日本語



（図5）ルーブリックの改良についての話し合い

この話し合いの結果、指導者が提案した④「教師の声の大きさや間の取り方」という項目には、「大きさ」と「間」という二つ要素があるため評価するのが難しいという指摘があり、「教師の声の大きさ」と「集中させる間の取り方の工夫」の二つの項目に分け、それぞれ4つの評価基準を作成した。さらに、「板書」という項目について、ICTを使用した場合の評価が難しいということで、「教材提示」という項目に変更し、4つの評価基準を作成した。

その結果、①授業の全体的なデザイン、②生徒の活動内容、③教師の発話（商業科/英語科）、④教師の声の大きさ、⑤集中させる間の取り方の工夫、⑥生徒との関わり方、⑦教材提示、の7項目からなるルーブリックを作成した。以下が、学生が改良した項目④、⑤、⑦のルーブリックの内容である。7項目あるので、すべて4点の評価をすると満点は28点となる。

#### ④教師の声の大きさ

- 4点：生徒全員に聞こえる大きさ
- 3点：ほとんどの生徒に聞こえている
- 2点：半分の生徒には聞こえている
- 1点：少数の生徒にしか聞こえていない

⑤集中させる間の取り方の工夫

- 4点：適切である
- 3点：適切ではあるが時々とぎれる
- 2点：理解に困り、あまり適切ではない
- 1点：不適切である

⑦教材提示

- 4点：授業の最後に黒板を見ると、本時の学習内容がよくわかる
- 3点：大体の内容がわかる
- 2点：字が乱雑で、内容もわかりにくい
- 1点：ほとんど板書していない

### 3. 2 2017 ルーブリックの結果

2017年12月11日までに英語科3名、商業科2名、合計5名の学生が模擬授業を行った。そのルーブリック（資料1）の結果が（表5）である。2016年の結果（表2）同様、全員の平均と指導者の評価に大きな差は認められなかったため指導者の評価は、学習者にとって納得できる結果であることが分かる。また、全員の平均点数よりも生徒役だけの平均点数の方が高い傾向にあることも2016年と同様で、模擬授業を行った学生が自分の授業内容について厳しく自己評価している結果であると考えられる。

さらに2.1で述べたような、指導者と学生との間の評価の大きなずれは、2017年の結果には見られなかった。これは、ルーブリックを指導者が提供するのではなく、学修者である学生が作成に関わり、自分たちで納得のいく評価項目とその記述語を作成した結果ではないかと考えられる。

（表5）ルーブリック2017の中間結果（満点28点 2017年12月11日）

	11月6日	11月13日	11月20日	12月4日	12月11日
合計	168	136	111	175	166
学生全員の平均	24	22.7	18.5	25	23.7
生徒役だけの平均	24.7	23.2	19.2	26	24
指導者の評価	25	23	20	25	25

### 3. 3 ルーブリックに関する中間アンケート結果

5名の模擬授業後、ルーブリックに関しての中間アンケートを行った。アンケート内容は2016年度の6項目(1、各学習活動のねらいを理解することができた。2、どのような力をつければ良いのか事前に理解することができた。3、到達点を事前に理解でき自分の取り組みの方向性を見いだせた。4、ルーブリックに基づく自己評価は、自分の学習計画や実施方法に良い影響を与えた。5、先生や友だちの評定を納得して受け止められる。6、ルーブリックに基づいて自己評価することはそれほど負担ではなかった。)に「7、ルーブリックの作成に学習者が参加することによって、評価の観点が明確になった。」を追加し、「1 全くそう思わない」「2 そう思わない」「3 どちらでもない」「4 そう思う」「5 強くそう思う」の5件法で回答を求め、さらに記述欄も設けた。中間アンケートの結果は表6の通りである。表6の上段A,B,C,D,E,F,Gは7人の学生のもので、それぞれの学生のアンケート結果と7つの項目の平均を記している。

(表6) アンケート 2017 中間結果

	A	B	C	D	E	F	G	平均
1、各学習活動のねらいを理解することができた。	2	4	5	4	4	4	3	3.7
2、どのような力をつければ良いのか事前に理解することができた。	5	3	5	4	5	4	4	4.3
3、到達点を事前に理解でき自分の取り組みの方向性を見いだせた。	4	4	4	3	5	4	4	4
4、ルーブリックに基づく自己評価は、自分の学習計画や実施方法に良い影響を与えた。	4	5	3	4	4	5	5	4.3
5、先生や友だちの評定を納得して受け止められる。	4	3	4	3	5	5	4	4
6、ルーブリックに基づいて自己評価することはそれほど負担ではなかった。	3	4	3	3	4	3	5	3.6
7、ルーブリックの作成に学修者(大学生)が参加することによって、評価の観点が明確になった。	4	5	3	4	5	4	5	4.3

アンケートの結果、7つの項目の平均がすべて3以上の回答であった。特に「2、どのような力をつければ良いのか事前に理解することができた。」「4、ルーブリックに基づく自己評価は、自分の学習計画や実施方法に良い影響を与えた。」の2項目の

平均は4.3で、学生はルーブリックを事前に確認しながら模擬授業の準備をしたり、実際に授業を行ったりすることは有効であると捉えていることが分かる。このことは以下の学生の自由記述にも表れている。(表7)

(表7) 学生の自由記述1

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• 態度や技能が客観的に見えると感じた。授業を行うのに明確な目標ができると思う。</li><li>• あらかじめルーブリックを用意しておくことでそれを意識して行うことができ、よかった点や改善点も明確になった。これからも学修評価の一つとしてルーブリックは必要だと思った。</li><li>• 客観的な評価をしている際に何を評価するのかの整理ができて評価しやすかった。</li><li>• 自分に足りないものが多いのと共に、自分の良い部分も見ることができて今後の修正につなげやすいと感じている。</li></ul> |
|---|

また「7、ルーブリックの作成に学修者（大学生）が参加することによって、評価の観点が明確になった。」の平均は4.3であり、学修者である学生自身がルーブリック作成に関わることの妥当性を示唆している。このことに関する学生の記述が以下である。(表8)

(表8) 学生の自由記述2

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• 自分たちでルーブリックを作り直したため評価しやすく、また、自分が授業をする際もどこに気を付ければ良いか分かりやすかった。</li><li>• 自作することによって意識が高まったのを感じた。</li></ul> |
|--|

#### 4. まとめ

今回のルーブリックの実践とアンケートの結果から、2016年度の結果同様ルーブリックを用いることによって学習活動のねらいや身につけたい力について事前に理解し、学修の方向性を見つけ、自己評価を自己改善に活用し、他からの評価を納得して受け止めることができたほとんどの学生が感じていることがわかった。このことから、教職を目指す大学生の模擬授業の評価において、商業科であっても英語科であっても、ルーブリックが有効であるという示唆が得られたと考える。ちなみに、2016年にルーブリックでの評価を実施している学生と2017年に初めてルーブリックでの評価を実施した学生の間ルーブリック結果やアンケート結果において大きな差は認められなかった。

今年度は2016年の実践の課題であった「ルーブリック作成の方法や内容に関する改良」に取り組んだ。学生と共にルーブリックの内容を検討し、自分たちが取り組み

やすい内容に改良してルーブリックを作った。このことに対して学生は、評価しやすく、気を付けるポイントが分かりやすく、模擬授業に向かう意識が高まったと述べている。つまり、学生が自分でルーブリックを作成することによって学修内容を把握し自分で自分の学びをデザインし、自立した学修者の育成につながったのではないかと考えられる。ある学生はルーブリックの作成に関して「自分たちでルーブリックの言いかえや新たな項目を増やしたが、評価する際に難しいと思ったこともあるので、何度か改善を続ける必要性があると感じた。」と記述している。この記述からも、学修内容に適したルーブリックを作ること自体が学修者にとっての学びであり、学修者がルーブリックを作るとは、まさに指導と評価の一体につながることであったと確認することができた。

ただし、学生 A は「1、各学習活動のねらいを理解することができた」という問いに「2 そう思わない」と答えている。このように、「2 そう思わない」と正直に回答した姿勢を指導者は真摯に受け止め、理解できていない状況について個別に対応する必要がある。

さらに今回は、ルーブリックの案を指導者が提案し、その案を学生が改良してルーブリックを作成したが、最初から学生がルーブリックを作成することも必要であると考えられる。1. はじめに、で述べたように、2020 年の新学習指導要領に向けた補足資料の中でルーブリックについて明記されているのであるから、教員として現場でルーブリックを作成したり、生徒に活用させるために指導したりすることが求められている。ルーブリックを最初から作成することは時間を必要とするものではあるが、教職を目指す学生にとっては、必要なことである。

さらに、シラバスの中にルーブリックを組み込み、履修登録の時点で、学生がその授業での学びの見通しを持てるようにすることは大切なことである。これは、教員個人でできることではなく、大学全体の体制を整えなければならないことでもある。今回の研究で得たこれらの課題について、今後も研究を続けていきたいと考えている。

## 謝辞

調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。

## 参考文献

- ・新学習指導要領（平成 29 年 3 月公示）  
[www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm)  
（取得日 2017 年 10 月 3 日）
- ・神保尚武 監修（2014.3.9）『言語教師のポートフォリオ【英語教職課程編】』JACET 教育問題研究会
- ・ダネル スティーブンス・アントニア レビ（2014）『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部。
- ・松崎邦守（2016.8）「外国語（英語）のルーブリック開発に関する実践的研究」北海道教育大学紀要。教育科学編 67(1) pp.211-220.
- ・上田勇仁（2017）「個人のリフレクションを評価するルーブリックの導入とその効果—プロジェクト学習におけるリフレクション支援方法の検討—」日本教育工学第 33 回全国大会 pp.975-976.

## 注

- <sup>1)</sup> 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」  
[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)  
（取得日 2017 年 10 月 5 日）
- <sup>2)</sup> 同上
- <sup>3)</sup> 平成 26 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）  
[www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2017/09/06/1380019\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/09/06/1380019_1.pdf)  
（取得日 2017 年 10 月 10 日）
- <sup>4)</sup> 次期学習指導要領等にむけたこれまでの審議のまとめ 補足資料  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021\\_4\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_4_1.pdf)  
（取得日 2017 年 7 月 20 日）
- <sup>5)</sup> 浦谷淳子（2017.3.31）「教職を目指す学生の英語授業におけるルーブリックの導入について」浜松学院大学学習支援センター紀要第 8 号 pp.61-74.
- <sup>6)</sup> 同上
- <sup>7)</sup> 同上

(資料1) ルーブリック 2017 (ルーブリックについての説明および記述欄省略)

模擬授業から学ぼう

ルーブリック 2017

	4	3	2	1
① 授業の全体的なデザイン	説明や生徒の活動など、授業の流れが良い	時々、授業の流れが途切れる	少し関連していて流れがある程度みえる	一つ一つの活動が関連していない
② 生徒の活動内容	ほとんどの生徒が興味を持ち活動しなくなる活動内容	約半分の生徒が興味を持つ活動内容	数人の生徒が興味を持つ活動内容	生徒が興味を持たない活動内容
③ 教師の発話(商業科)	ほとんどの生徒が理解できるように、わかりやすく説明している	約半分の生徒が説明を理解できている	約三分の一の生徒が説明を理解できている	ほとんどの生徒が説明を理解できていない
③ 教師の発話(英語科)	ほとんどの生徒が理解できる英語を使って、わかりやすく説明している	英語を使って説明しているが、理解できていない生徒もいる	英語を使っているが、日本語の方が多い	すべて日本語
④ 教師の声の大きさ	生徒全員に聞こえる大きさ	ほとんどの生徒に聞こえている	半分の生徒には聞こえている	少数の生徒にしかな聞こえていない
⑤ 集中させる間の取り方の工夫	適切である	適切ではあるが時々とぎれる	理解に困り、あまり適切ではない	不適切である
⑥ 生徒との関わり方	必要で適切な支援をしている	動いて、時々支援をしている	動いているが、支援をしていない	同じ場所において、支援をしていない
⑦ 教材提示	授業の最後に黒板などを見ると、本時の学習内容がよくわかる	大体の内容がわかる	字が乱雑で、内容もわかりにくい	ほとんど利用していない

合計 ( ) 点